

自動観測装置からみた沿岸水塊

誌名	水産海洋研究会報
ISSN	03889149
著者	岡部, 勝
巻/号	19号
掲載ページ	p. 195-196
発行年月	1971年9月

農林水産省 農林水産技術会議事務局筑波産学連携支援センター
Tsukuba Business-Academia Cooperation Support Center, Agriculture, Forestry and Fisheries Research Council
Secretariat



VII 「定置漁業の諸問題-相模湾を中心として-」研究座談会

水産海洋研究会
主催 神奈川県水産試験場
神奈川県定置網漁業研究会

日時：昭和46年4月30日（金）13:00~17:00

場所：神奈川県水産試験場相模湾支所会議室

コンピナー：伊藤博・信太一夫（神奈川県水試相模湾支所）

話題および話題提供者

1. 自動観測装置から見た沿岸水塊 岡部 勝（神奈川県水産試験場相模湾支所）
2. 河川水とマアジ漁況との関係 木幡 孜（神奈川県水産試験場相模湾支所）
3. マアジの最近の状況について 服部 茂昌（東海区水産研究所）
4. 定置網漁業の省力化について 森 敬四郎（東海区水産研究所）
5. キャッチホーラー（定置網用網起し機）の使用状況について
川辺 実（株、小八幡漁場）
6. 定置漁業漁海況の問題 - 海洋汚染と急潮 -
宇田 道隆（東海大学海洋学部）

1 自動観測装置からみた沿岸水塊

岡部 勝（神奈川県水試相模湾支所）

69年8月末、当所（小田原市）沖合800m、水深45mの地点に、沿岸定置観測の自動化を目的として、連続観測記録装置が設置された。Sensor及び水中発信部は水面下10mに buoy により垂下されている。観測項目は塩分・水温・波高・潮位・流向・流速である。

そこで設置完了後の約5ヶ月間について、一点の記録が周辺海域の海況をどの程度とらえているかを中心に検討してみた。（方法その他については、昭和44年当所事業報告）

要約するとその結果得られた知見は次のような点であった。

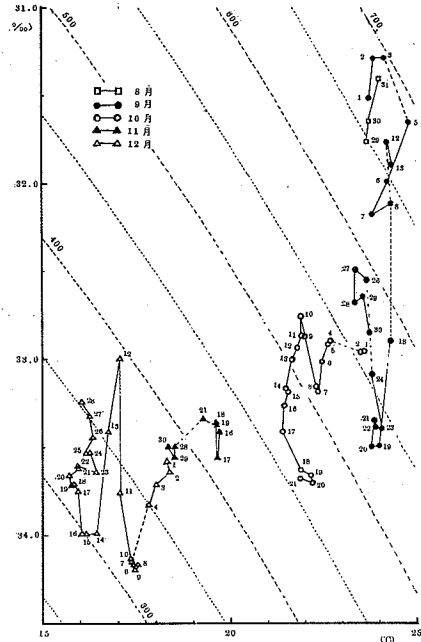
水温、塩素量について見ると日周変化は認められなかった。潮時を考慮した場合も同様であった。またこれらの24時間平均値をもとにTS-diagramを作成し（第1図）、水塊の変動を追跡して見たところ、成層期においては水塊の移動をある程度とらえることが出来た。すなわち、図から同じ水塊が存在したと思われる日を幾つかのgroupに分けて、隣接して張り立てられている道合漁場の漁獲量と比較したところ、低塩分水と高塩分水が入れ替る日の前後に漁獲の山が対応しているように

思われた(第2図)。つまり漁況の変化をもたらす海況は、局部的な変化と云うよりはむしろそれより一段高いlevelで起る変化、例えば相模湾全体の水の交換などに対応しているのではないかと思われた。

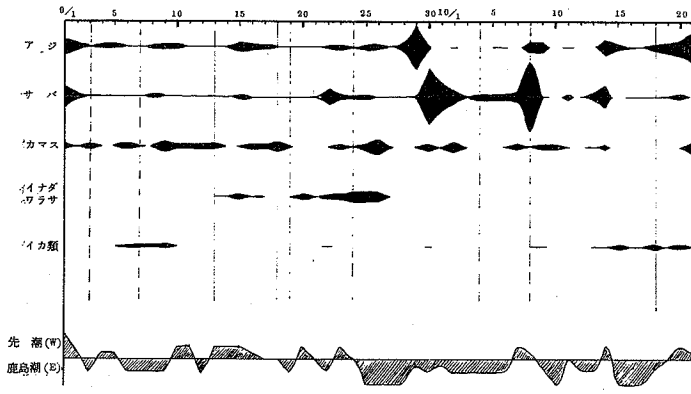
しかし、対流期に於ける周辺海域の観測結果との対比から見ると、観測装置は附近に流入する早川等の河川水の影響域内にあり、躍層の形成されやすい水深が20mにも及ぶ等、非常に複雑な海況下にあるため、少なくとも冬期に於ては周辺の海域を代表するとは云い難かった。

一方、流向流速の記録から潮汐流と海流の分離は困難であった。

以上、資料の取扱方法や検討が不十分であるが、一点の観測資料の解析方法について、より良い方法をご教示いただければ幸いである。



第1図 TS-diagramによる月変化の追跡



第2図 水塊区分と道合漁場における主要魚種別漁況ならびに流向との関係